

論 文 要 旨

車 田 忠 継

戦前期中選挙区制度における選挙構造と地域政治秩序 —千葉県第1区東葛飾郡と川島正次郎を中心に—

戦前・戦後を跨ぎ代議士であり続けた1人に、川島正次郎（1890～1970年）なる人物がいる。川島と総選挙の関わりの始まりは、小選挙区制度下の1924年5月第15回総選挙で、旧千葉県第3区（東葛飾郡）から立候補（憲政会系無所属）したことに遡る。そこでは、京成電鉄社長の現職代議士である本多貞次郎（政友本党）に惜敗した。雪辱を晴らす為、1925年男子普通選挙法（中選挙区制度）下の1928年2月第16回総選挙（第1回普選）に立憲政友会候補として千葉県第1区（千葉市・千葉郡・東葛飾郡・市原郡・君津郡）から立候補し、初当選の栄冠を掴む。この後、1930年2月第17回総選挙・1932年2月第18回総選挙・1936年2月第19回総選挙・1937年4月第20回総選挙・1942年4月第21回総選挙の全てに政友会候補として出馬し、全てに当選を果たす。第2次世界大戦後は、齋藤実内閣の岡田啓介海軍大臣の下で海軍省参与官を務めていたこともあり、公職追放。雌伏の時を経た1952年10月第25回総選挙（自由党）で千葉県第1区から立候補及び当選し、以降、死去する直前の1969年12月第32回総選挙（自由民主党）迄、連続当選を果たした。この間、川島は第2次鳩山一郎内閣の自治庁長官及び行政管理庁長官として初入閣後、頭角を現し、岸信介内閣の党幹事長を経て、最終的には岸派から分離・独立して川島派（交友クラブ）を立ち上げると共に、党副総裁を長期間に亘り務めた。つまり川島は戦前と戦後を通じて代議士であり続ける共に、代議士になってからは落選を知らない、尚且つ戦後は党人派代議士の重鎮として存在感を発揮した、日本政治史上、稀有の存在と言えよう。

この川島は、何故、戦前期総選挙で勝ち続けることが出来たのか。私学である専修大学経済科を1914年に卒業したものの、東京帝国大学の卒業生では無い。専修大学在学中から内務省警保局筆生（卒業後属官）を務めていたものの、高等文官試験に合格してはいない。多摩川水力電気株式会社常務取締役を務めてはいたものの、実業家では無い。また地方議員を務めた経歴も無い。強いて言えば、前述の内務省属官、退職後の東京日日新聞政治部記者、東京市秘書課長や初代商工課長のキャリアがあるに過ぎない。川島は高級官僚からの天下りの純然たる“輸入”代議士でも無ければ、地元で市町村会議員から県会議員を経て国政に進出する“叩き上げ”代議士でも無かった。本研究は、そのような川島の連続当選

の要因を解き明かす為、川島が挑んだ戦前期 7 回の全ての総選挙を分析し、川島の選挙区での政治活動、県議会議員選挙との関係、立候補過程、選挙運動、選挙結果（得票率から見た地盤・選挙費用・選挙違反から見た集票軸）、即ち“選挙構造”を明らかにしていくものである。そして、これらを通して、選挙区で形成・確立された地域政治秩序の在り様を論じていくものでもある。各種選挙の低投票率が指摘される現在であっても、選挙が政治参加の最大の回路の 1 つである以上、その実態に関する史的分析は、日本政治や民主主義を理解する為にも、また未来図を描く為にも、少なくない意義があると思われる。なおフィールドとしては、川島の地盤である東葛飾郡（現市川市・船橋市・松戸市・柏市・鎌ヶ谷市・我孫子市等）を設定した。この地は 1920 年代から 30 年代にかけて都市化が進展するにも拘わらず、農村部町村と沿岸部町村の経済的格差、更には沿岸部町村間での交通格差が併存し、極めて多様な課題を抱える有権者が居住する空間である。その意味では、都市部的要素と農村部的要素が混在していた。

序章では、まず選挙過程・地域政治秩序を巡る歴史学分野の研究、更には政治学分野での代議士個人後援会研究の業績を整理し、両者を結び付けた。その上で、特に歴史学分野での先行研究の課題、即ち「集団投票論」・「有権者の無節操性」・「ナショナル＝スイング論」の妥当性、対象事例の設定の当否、所与の前提としての政党の地盤を指摘した。そこで 4 つの仮説を立てた。即ち①川島が強い意志の持ち主で、粘り強く活動を積み重ね、6 期連続当選を果たし、最終的に“遅咲きの党人派代議士”としての立ち位置を形成した。②東葛飾郡に政党の地盤は存在しないことから、この地域での集団投票の論理は普遍的・支配的なものでは無かった。③従って代議士個人の地盤が形成された。④その結果、川島に象徴される代議士を機軸とした地域政治秩序が形成された。この仮説を検証する為、以下の方法論を設定した。第 1 は、1 つの選挙区と 1 人の人物を結び付け、1 回の選挙だけではなく、長いスパンのそれを分析する。第 2 は、それぞれ各回の総選挙における川島の選挙構造を分析し、最終的にはそれらの形態変化を論じる。第 3 は、川島の特徴を浮き彫りにする為、また選挙が川島と有権者だけで彩られるものでは無い為、常にライバル代議士と比較する。第 4 は、可能な限り、歴史学の領域で殆ど明らかにされていない後援会の実態（誕生要因及び仕組み）を論じる。第 5 は、川島を巡る選挙構造の分析結果から、最終的に千葉県第 1 区東葛飾郡の地域政治秩序の在り様を見通す。第 6 は、東葛飾郡に点在する博物館・資料館・図書館が所蔵する未刊行史料を発掘し、使用する。

本論は、時系列で分析した第 1 章から第 10 章で構成されている。

第 1 章「川島正次郎と東葛飾郡を巡る史的前提—1924 年 1 月県議会議員選挙の分析—」。県議会議員選挙の分析を通して、後に川島のライバルとなる代議士本多貞次郎（政友会）と県議会議員の関係を整理した。その結果、川島が登場する直前の東葛飾郡の地域政治の在り様を描いた。

第2章「1924年5月第15回総選挙と川島正次郎」。東葛飾郡の憲政会系の有力者(地方議員)の推薦に基づき、川島が初めて立候補した総選挙を素材として、その選挙構造を分析した。その結果、本多(政友本党)に敗れるものの、川島が次回総選挙で雪辱を晴らし得るだけの政治的基盤、即ち地盤や人間関係を手に入れたことを明らかにした。

第3章「川島正次郎と『二大選挙』—1928年の2つの普選—」。一時、川島はライバル本多(民政党)と妥協して立候補を断念したものの、捲土重来を期し、政友会に入党。初めての普選となった1928年1月県会議員選挙に関与し、立候補の意思を示しつつ、政友会の齋藤三郎(前県会議員)と党本部からの公認を競い、地域の有力者からの推薦を経ずに、その座を勝ち取った。その状況下で実施された2月総選挙を分析した結果、東葛飾郡各町村で本多に競り勝ち、圧倒的な票を集め、初当選した姿を描いた。

第4章「代議士個人後援会の誕生」。第1回普選の経験は、候補者の選挙に臨む姿勢を変えていく。その彼らが導き出した答えが、主に地方議員を介在させた町村単位の個人後援会の結成であった。千葉県第1区の中で最も早く個人後援会を組織した多田満長(民政党)、また本多(政友会)の後援会を事例として、その誕生過程や仕組みを解き明かした。併せて他府県との若干の比較、既成政党系政治団体との関係性も論じた。この結果、後援会が政党の影響力の小さい地域で数多く存在したことを示した。なお初当選後の川島は、政友会の主流派(鈴木喜三郎派及び鳩山一郎派)に所属し、代議士としてのスタートを切る。

第5章「1930年2月第17回総選挙と川島正次郎」。川島は多田や本多と異なり、後援会を結成せず、議会報告演説会を通じて、広範な有権者との直接的な結び付きを志向した。この取り組みの中、従来ライバル本多に加えて、新たに地盤を同じくする民政党の“輸入候補”(元大蔵官僚)篠原陸朗が登場する。加えて川島は政友会の現職代議士である志村清右衛門(政友会)と党本部からの公認を争い、やはり地域の有力者からの推薦会を経ずに、その座を勝ち取った。この2月総選挙の選挙構造を明らかにした。

第6章「1932年2月第18回総選挙と川島正次郎」。まず川島、本多、篠原の3人の代議士と1932年1月県会議員選挙の関係を論じた。その上で、2月総選挙の展開を詳細に検討したが、特に2つの点に着目した。1つは、川島は立候補の際、三度、地域の有力者からの推薦会を経ずに立候補したことである。それは、今後、川島を機軸として形成される地域政治秩序の不可逆性の指標とする。2つは、千葉県第1区で確認出来た最初で最後の具体的な政党支部主導の地盤協定の実態を明らかにしたことである。フィールドの東葛飾郡では無く、千葉郡の事例だが、地盤協定は機能した反面、それに従わない有権者が存在することから、政党の影響力の小ささを見出せた。

第7章「川島正次郎の成長」。川島正次郎の代議士としての裾野の広がりを実証する為、次の3点を論じた。第1は、齋藤実内閣の海軍省参与官に就任し、政府の末席に名を連ねたことである。第2は、地域政治への関与及び利益誘導によ

って、選挙区の為に汗を流したことである。第3は、1934年4月県会議員補欠選挙（君津郡選挙区）の分析を通して、多田や本多と異なり、地盤では無い君津郡で後援会を結成したことである。特に君津郡川島後援会は、政友会系政治団体がそのまま移行して成立しており、政党の地域政治への影響力が代議士個人に収斂されていく契機と思われる。加えて、やはり地盤では無い千葉郡で、しかも町村の垣根を越えた、恐らく地方議員を介在させない後援会を結成したことも、前述の多田や本多と異なる。

第8章「1936年2月第19回総選挙と川島正次郎」。前回総選挙から4年も経過する為、まず、その間の川島・本多・篠原の政治活動を示した。次に選挙粛正運動の枠組みの中、彼ら代議士と1936年1月県会議員選挙の関係性を論じた。その上で、2月総選挙の選挙構造を分析したが、特に選挙公報に注目した。ここで川島は、本多や篠原と異なり、今まで同様、政治の目的が国民生活の向上であることを明確に打ち出した。総花的な政策を掲げる彼らとの差別化を図り、連続4回当選の実績を残したことを明らかにした。

第9章「1937年4月第20回総選挙と川島正次郎」。まず1937年2月、長年の川島のライバルである本多の病死（79歳）の結果、初めて政友会千葉県支部が主導して後継候補（市原郡選挙区の県会議員星野懿吉）を擁立したことを論じた。しかし星野が惨敗し、故本多票は同じ政友会の川島では無く、新たな民政党候補の成島勇（県会議員）に流れたことから、東葛飾郡の有権者は政党では無く、候補者個人を基準とした投票行動を取っていたと指摘した。同時にそれは、この地での政党の影響力の小ささを示す事例とも位置付けた。この他、選挙後、川島が政友会千葉県支部長に就任する過程を分析し、戦前期の彼のキャリアの1つの到達点を示した。

第10章「1942年4月第21回総選挙と川島正次郎」。前回総選挙から5年も経過する為、まず代議士と各種県会議員補欠選挙の関係を見た。次に川島の政友会内での派閥遍歴を纏めた結果、嘗ての主流派を離れ、元幹事長の森恪の下に集うが、その森の死後、中立無派閥の不遇な時代が長かったことを明らかにした。しかし、その川島が前田米蔵を介して中島知久平に接近し、その直系代議士になり、革新派に属したことで、政友会解党直前の時期に党幹部の“総務”に就任したことも明らかにした。これは、川島にとって戦後政治史への足掛かりとして位置付けられる。更に代議士と1940年1月県会議員選挙の関係性を示した上で、翼賛選挙の枠組みの中で実施された1942年4月第21回総選挙の選挙構造を論じた。川島は最終的に連続6回当選の実績を残すが、その背景として、当初の予定と異なり、ライバル篠原の中央政界での人間関係に敗れ、非推薦候補となったことも指摘した。

終章では、これらの時系列の縦糸での分析を纏める為、選挙構造を政治活動・県会議員選挙との関係・立候補過程・選挙運動・選挙結果の横糸の視点で紡ぎ直した。その結果、川島の選挙構造を次の3点とした。

第 1。川島はその政治活動の中で、代議士として有権者に魅力ある器を示しつつ、地域政治の取り纏め役として、地元選挙区への利益誘導の媒介として、実績を積み重ね、これを選挙運動の中で巧みに利用し、有権者にアピールし、集票に繋げていった点である。原則として、政党の地盤が存在しない千葉県第 1 区東葛飾郡だからこそ、個人の政治的資質で有権者を引き寄せる為、川島は政治活動と集票活動を連動させたのである。また、それを取り仕切る選挙運動の実務責任者（選挙事務長）に関しては、たった 1 度の例外を除き、梨本太兵衛（元県会議員）がその任に当たっている。これは、選挙運動・戦術・戦略の統一性、柔軟性、秘匿性を生む。その意味において、川島の選挙構造は重厚性を帯びていたと言えよう。

第 2。原則として、政党の地盤が存在しない中、個人の方で川島は地方議員や後援会を通じた特定有権者から集票回路、演説会・ポスター・ビラ・書状を通じた不特定有権者から集票回路、いわば 2 種類の集票回路を組み合わせて構築した点である。前者に関して言えば、川島は県会議員の川口為之助を初めとして、多くの地方議員を介在させて、買取も含め、有権者個々人から集票していく。特に川島の場合、嘗て敵対関係にあった代議士の協力者・系列者であっても、それを包み込んでいく。これは、「人には誰にも欠点がある、その欠点を一々取り上げてみたら文句ばかりいつて居なければならない、だから欠点は忘れてその人の良いところを見て付合はなければならない」（『東京朝日新聞』1937 年 4 月 28 日付千葉版）と考えていた川島の思考の為せる業であった。加えて多田や本多と比較した場合、結成の歩みは遅く、その数は少ないものの、川島は地盤の東葛飾郡に加えて、千葉郡、更に君津郡でも後援会を持ち、票の掘り起こしに努めた。つまり川島は、薄層ながらも千葉県第 1 区全体に跨る長大な集票ネットワークを形成しており、これが特定有権者からの集票の回路となったのである。後者に関して言えば、ライバル候補者と異なり、川島は写真入りの印刷物を好んで作成・配布した。しかも政治の目的を国民生活の向上として捉える姿は一貫しており、それを常に有権者に訴え続けた。これこそ不特定有権者を包み込み、自身への投票を促す起爆剤に他ならなかった。なお原則に対して例外を示すと、千葉県第 1 区東葛飾郡で確認出来た政党の地盤は、民政党支持の中山町と富勢村など、極めて少ない。この地では政党の影響力が大きく、地域政治秩序の機軸的存在だったと思われる。

第 3。1928 年～1942 年の間、政友会が与党であれ野党であれ、粛正選挙であれ翼賛選挙であれ、常に川島個人を支持して投票する有権者が居住する町村、つまり地盤を東葛飾郡の中に抱えていた点である。純然たる地盤としては行徳町、これに次ぐ地盤としては八栄村・国分村がこれに当たる。本多は途中で病死（1937 年 2 月）するので除外するが、18 年もの間、揺るがず 1 人の代議士を支えた地盤の町村は、ライバル代議士には見られない。この地の有権者は、選挙の度に支持先を変えたりせず、節操のある投票行動を取ったと言えよう。このような東葛飾郡の地盤が、前述した川島の重厚且つ長大な選挙構造を支えていたので

ある。

なお歴史学の分野で殆ど言及されてこなかった戦前期代議士個人後援会に関しては、次の結論を得た。まず後援会結成の前提条件として、地域での政党や代議士個人が置かれた政治状況、その個人の資金力、この2つを挙げた。農村的要素の強かった1920年代の千葉県第1区東葛飾郡の場合、本多後援会も多田後援会も“代議士—地方議員—有権者”と連なる介在型組織であった。しかし都市化が進展し、この地の農村的要素が弱まると、地方議員は増加した新しい有権者を把握し切れなくなる。次に結成されるであろう後援会は、この瞬間、2つの道に分かれた。1つは、既成政党系政治団体が後援会に移行し、昔からの有権者を代議士個人の名の下に束ね、その結束力を高めることである。正に君津郡川島後援会が相当する。もう1つは、有権者と直接的に結び付くことを志向した、直結的な後援会である。正に千葉郡川島後援会が相当する。この他にも県会議員の後援会、極めて情報量が少ない松戸町川島後援会の存在も確認出来たが、1940年代を迎えると、多田後援会を除き、それらを見出せなくなってしまう。しかも史料を見る限り、千葉県第1区の場合、後援会が推薦状や演説会等、“見える”活動に従事しておらず、その存在の把握自体が難しい。しかし実際には君津郡川島後援会の“見えない”活動の一端が確認出来た為、決して後援会は形式的でも無ければ、機能不全な組織でも無かった。むしろ恒常性を持ち、且つ違法性を帯びながらも、補助的集票行為を繰り返していたと考えられる。推測の域を出ないが、存在するか否かは別として、恐らく前述の千葉郡川島後援会のような萌芽的な直結の後援会が生き残り、1940年代にその形態を整え、1950年代以降に本格化していくのであろう。

この3つの選挙構造を持つ川島だが、本研究での分析を通して、その強い個性を感じずにはいられない。繰り返しになるが、政治の目的を国民生活の向上に置いた川島は、その実現の程度は別として、強い意志を持ち続け、粘り強く代議士として生き抜いた人物であった。従って「若手職業代議士」（民衆動員は得意だがカネはあまりない）でもなければ、「陣笠代議士」でもない。川島は最終的に49歳で党幹部クラスの末席に名を連ねた、叩き上げの“遅咲きの党人派”代議士であった。学歴・資金・官歴・出自等の政治資源に乏しくとも、選挙に勝ち続けることで、代議士としての政治的序列を上昇させたと言う意味において、当時としては新しいタイプ、稀有なタイプの代議士のように思われる。ここで戦後政治史への足掛かりを得た川島は、時を経て、欠くべからざる強い個性の持ち主として、その歩みを進めることとなる。

前述の通り、1924年から1942年の長きに亘り、川島は同一政党や反対党の地盤を同じくする候補者と競い合い、政治活動・選挙・利益誘導を重ね、地域の有力者を傘下に従えらると共に、後援会などを通して彼らや有権者の組織化に取り組んだ。結果、彼は地域や選挙区に多大なる影響力を発揮し、政党のそれを凌ぐようになる。換言すれば、川島が名望家に代わり、拡大された「小宇宙」の中に拡散する政治・経済・社会の統合者として成長すると共に、政党と地域社会を結

び付ける環の如き役割を担うことになるのではないだろうか。いわば地域政治秩序の担い手は、名望家から代議士及びその周辺へと移行し、川島は地域政治に君臨する存在となっていたのである。本研究では、これを“代議士秩序”と定義したい。総選挙の立候補過程を見た際、川島が推薦会を経ずに、6回の連続当選を積み重ねていくことは、その指標の1つと考えられる。最早、川島には、地域の有力者からの支持と合意を調達する通過儀礼は必要なかったと言えよう。これにより、序章で示した仮説が立証されたこととなった。

最後に本研究を発展させる為の素材として、次の4点を挙げたい。第1は、町内会（部落会）の役割である。東葛飾郡の町内会と選挙の具体的な関係性を示す史料は、東京市等と異なり、管見の限り、現時点では発見出来無かった。しかし確かに町内会が存在し、その役員が多くが地方議員の地位にあったことから、この地でも東京市等と同様、町内会は何かしらの形で選挙に関わっていたと思われる。第2は、第2次世界大戦後の千葉県第1区と川島を巡る選挙過程研究である。戦前と戦後の連続性及び非連続性と言う視点から、在野の川島と3回の戦後総選挙（1946年4月第22回総選挙～1949年1月第24回総選挙）の関係、盟友の川口の県知事選挙（1947年4月）での役割、戦後日本国憲法体制下で新しくスタートした参議院選挙との関係、川島と各種県会議員選挙の関係等、多くの課題が設定出来る。第3は、統計的な視点で、他地域との比較しつつ、代議士個人後援会の在り様を検討すると共に、各地域の政治状況や選挙過程と関連付けることである。時間は掛かるが、これによって、代議士個人後援会や政治団体の中に共通する特徴を抽出することが出来るであろうし、これがあって初めて、本研究で示した千葉県第1区東葛飾郡の特徴をより一層、浮き彫りにし得る。第4は、川島の選挙構造を彩ったであろう2つの政治資源、即ち後援会の活動実態や政治資金の調達方法についてである。後援会の場合、パーソナル且つインフォーマルな性質上、史料収集が難しい。また、その活動が違法性を帯びる場合すらある。加えて政治資金は、より一層、詳細が把握し難い。これらに関しては、今後、千葉県第1区に散在する各種博物館及び図書館等が所蔵する史料の調査、代議士やその周辺人物の縁故者へのインタビュー等を重ねることで、分析を継続していきたい